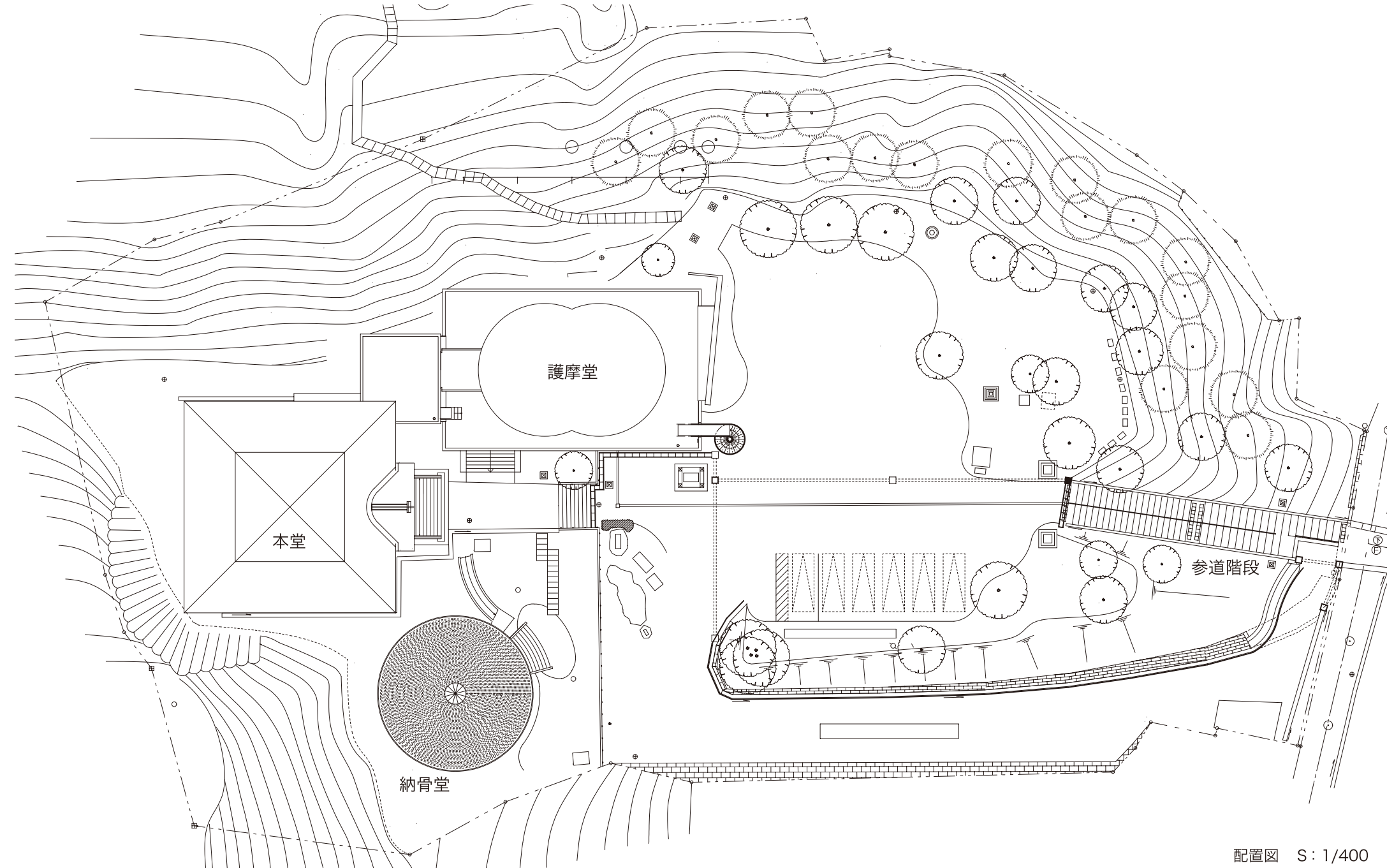


愛染寺永代供養納骨堂

「無憂」



配置図 S: 1/400

愛染寺の境内に建つ、永代供養納骨堂「無憂」

霊峰白山を望み、柴山面を眼下に取る。愛染寺の永代供養納骨堂「無憂（むう）」は、高台に建つ円形の納骨堂。上下（かみしも）がなく、すべて平等の世界を表しています。

昨今流行しているような機械化や効率化を求めた納骨堂ではなく、地元の加賀の杉や白山山系の土など、この地の天然素材をふんだんに用い、ここから立ち上がる空間を大切にしました。ガラス張りの天井を見上げると、青空や星空も仰ぎ見ることが出来ます。またゆとりある各階の正面には、多様な花々が描かれた、絵の宝石と呼ばれる美しいガラス絵が配され、天上世界の花々のように彩られています。そして中央には、愛染寺住職の書による「南無大師遍照金剛（なむだいいへんじょうこんごう）」の軸が掲げられ、自然光に照らし出されています。納骨堂「無憂」にはいつも穏やかな空気が流れ、その空間全体は尊いぬくもりで包まれています。

永代供養納骨堂「無憂」の建築について

永代供養納骨堂「無憂」は、愛染寺境内整備計画の全体計画の中に位置づけられた建築です。計画は全体計画策定時からはじられており、建築の規模的には大変小さな建築となっていますが、全体計画の中では大変重要な役割を担っています。先に建設された護摩堂とは本堂参道を挟んで対の位置に計画されており、参道階段を登りこの3つの建築で愛染寺全体のアイデンティティをつくりだしています。

「寺院」は、伝統的な建築形式で建築されることの多い建築ですが、それ以前に「寺院」として当時から持ち続けているもの、更には持ち続けていなければならないものがあるという考え方が、整備計画を貫く理念です。この理念を受け納骨堂が本堂脇に増築されましたが、「人々の拠り所」であること、そして「まちのシンボル」であること、更に建築をはじめとする工芸・美術・アートにおける「精一杯の技巧」であることも変わっていません。伝統的な建築形式を見つめながら、寺院建築をさまざまな意味で開き、さまざまな人々がここに訪れ、親しみを積極的に利用して頂ける（使いやすさ、わかりやすさ、親しみやすさがある）建築のデザインが、まちづくり、景観づくりという観点からも、大切だと考えました。

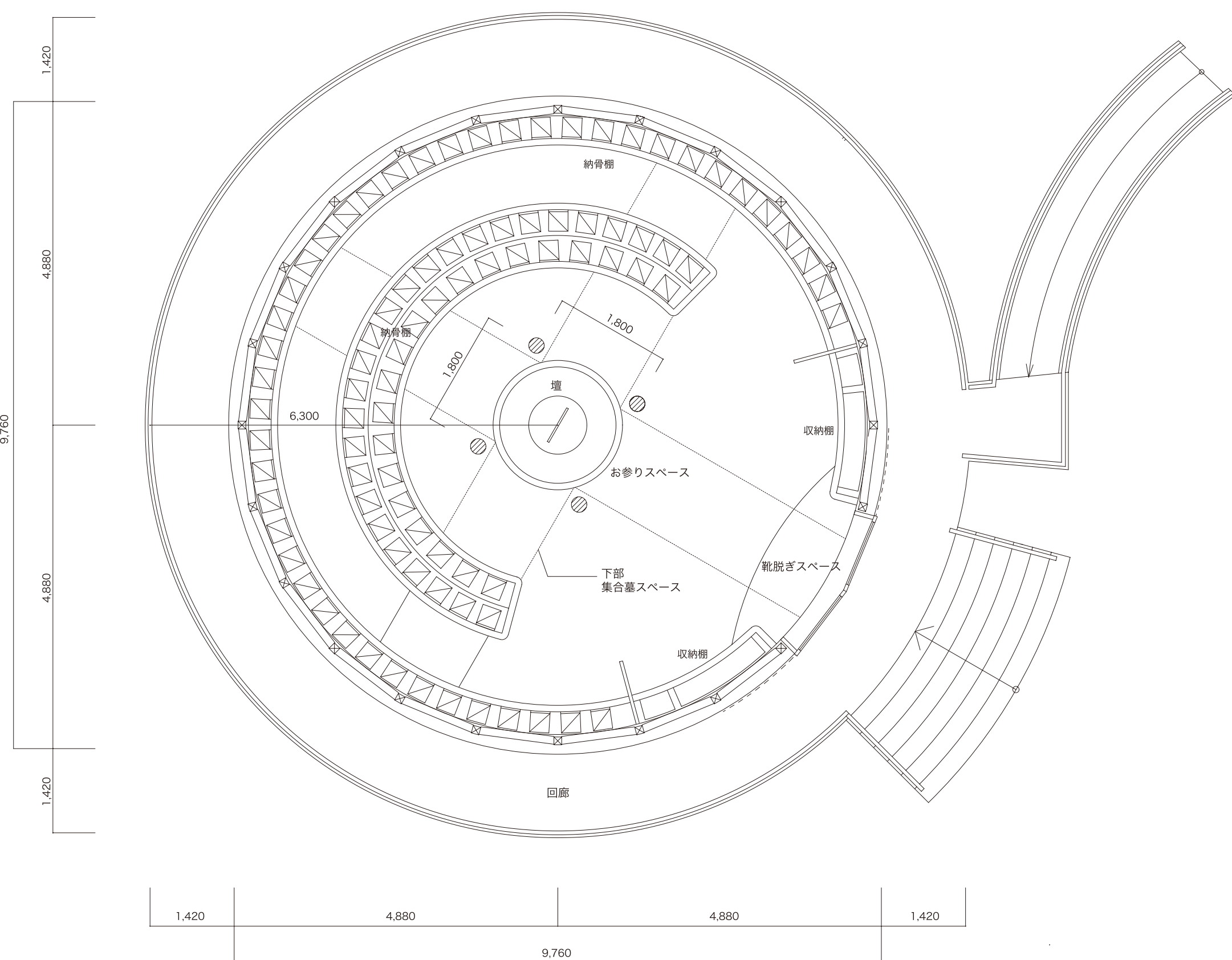
具体的には、バリアフリーという観点では、バリアフリー社会推進受賞の護摩堂の建築と同様に、段差をなくしエントランスにはスロープを設けてあります。ユニバーサルデザインという観点では、従来のお寺の建築イメージだけを追求するのではなく、まちの景観をかたちづくる。お寺のシンボル性に基き、現代を生きる私たち自身が親しみが持てる機能で使いやすいデザインとして計画されています。この意味で、過去と未来を繋ぐエージェンツとして、この建築が機能することが必要だと考えました。あらゆる部分を現代的な視点で捉え直しました。

愛染寺の建築デザインには、大胆に現代的な価値観とメッセージを取り入れているのが特徴です。伝統を引き継ぐ本堂をはじめ、仏教美術に価値のある仏教美術も多くありますが、これらが現代的な建築、工芸、美術、アートと融合し、老若男女の区別なく現代に生きる人々にさまざまな形で開かれ、親しみをもって利用されるように計画いたしました。護摩堂と同様に現代のデザインを採用し、納骨堂の納骨スペースの羽目殺しはガラス絵作家によって制作されました。現代の視点に立つ「寺院」を捉えることによって、寺院が開かれより多くの人が近づけることができ、より本質的な「寺院」の伝統が守られると考えました。愛染寺の境内に納骨堂が完成し、愛染寺は人々の心象風景にも投影される、「人々の拠り所」、「まちのシンボル」として、現代の「精一杯の技巧」により「寺院」に近づけたのではないかと考えています。改めて、現代に生きる私たち自身の、これから未来へと続く社会や環境に対する役割と責任の大きさに気づかされました。

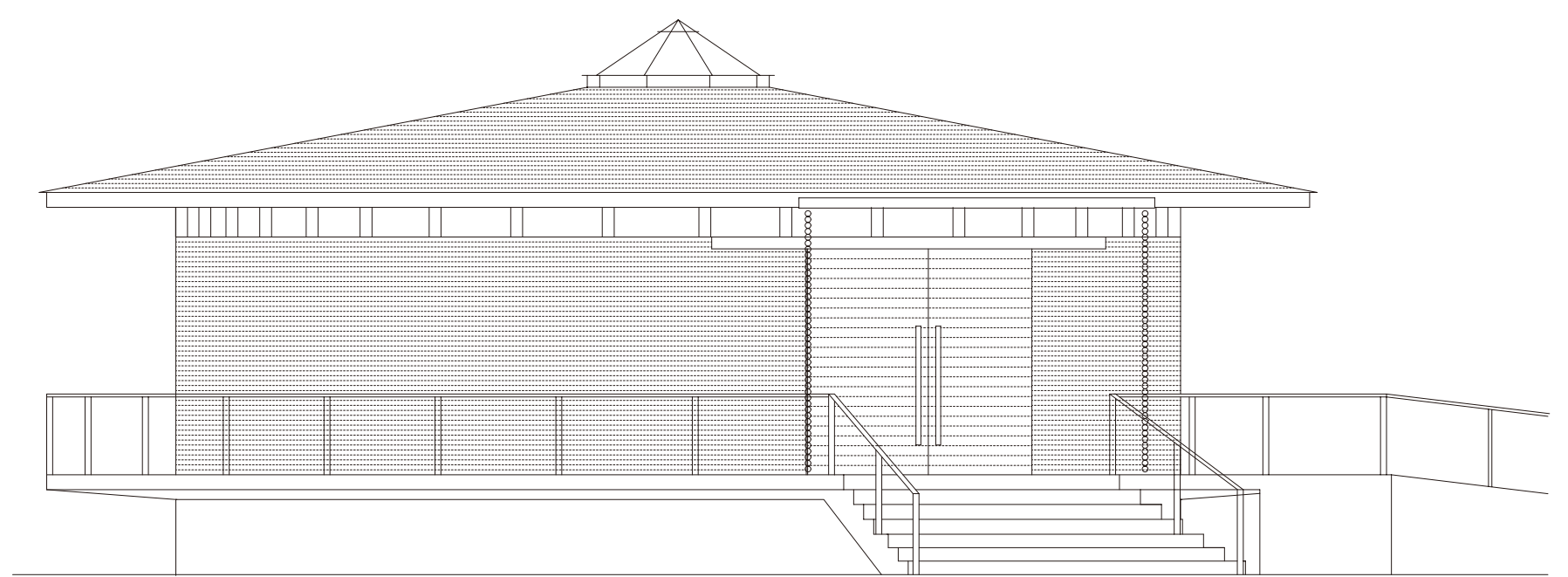


愛染寺境内全体

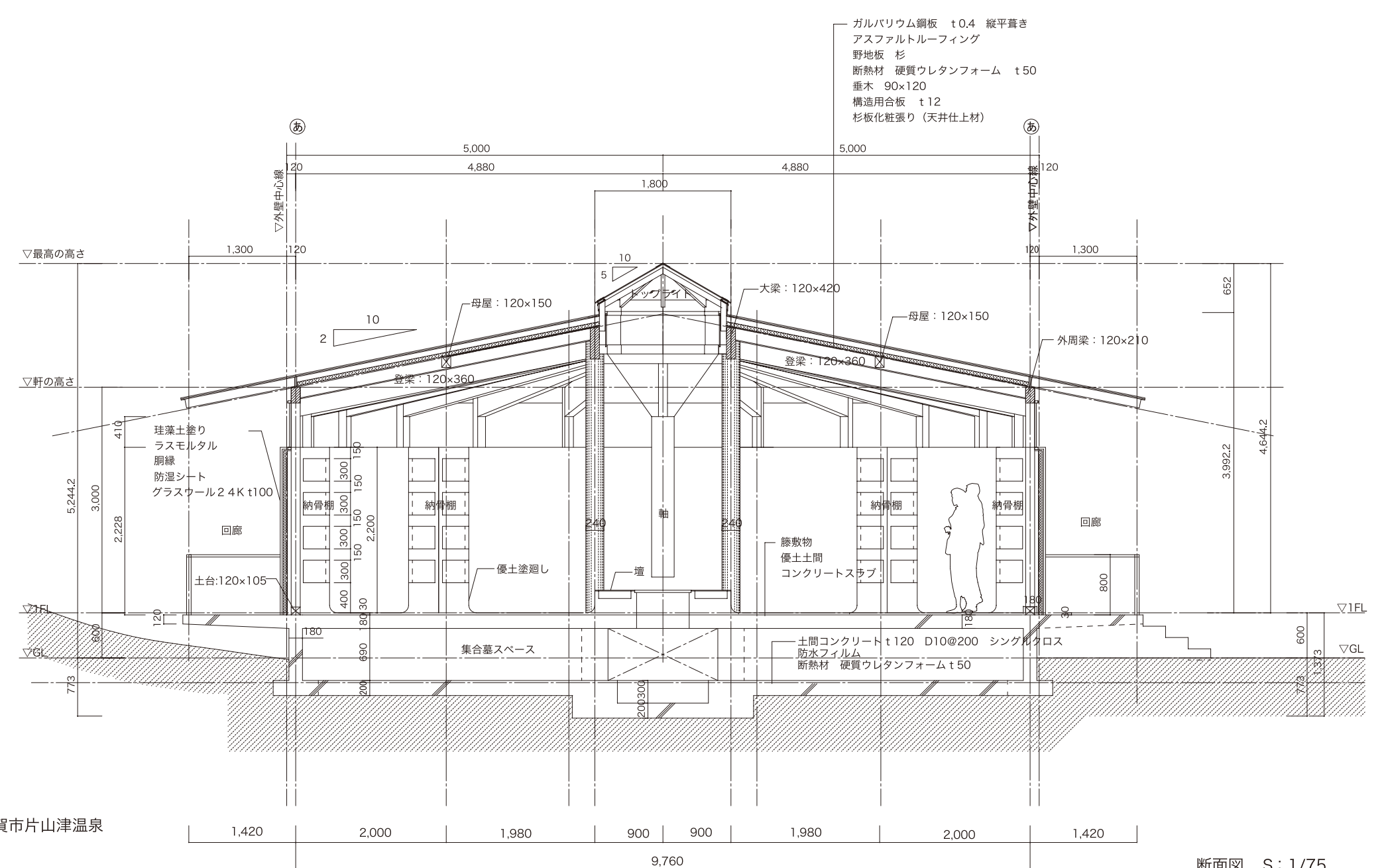
入り口より内部を見る



平面図 S: 1/75



立面図 S: 1/75



断面図 S: 1/75

建築データ
 建築場所 石川県加賀市片山津温泉
 床面積 78.56㎡
 規模 地上1階
 構造 木造
 竣工 平成21年7月



正面より見る

トランプライの彫り筋が光が射す

内部より入り口方向を見る

ガラスの層

木窓より見る